

京都徒然

塚田 實

四月十四日ペン川柳会を滋賀県彦根市で開催、翌日は長浜の曳山祭りを観に行つた。曳山の舞台で、小学生の演じる「こども歌舞伎」で嫁姑問題をやるなど面白かつた。

この機会に京都まで足を延ばした。

大学時代一番親しかつた友人I君と暫く連絡が取れなくなつていた。諦めずに携帯電話に電話をかけ続けると男性がでた。「自分はI君の親しい友人で、心配している」と伝えると、相手はI君の息子と言い、事情を話し出した。

I君は数年前脳梗塞を発症し、命は取り留めたものの、今は京都の介護施設に入つていているという。言語機能に障害が残つたらしく、自分では話すことは出来ないが、こちらの話すことは理解し、うなづくことは出来るので、是非見舞つてほしいと。

四月十七日、京都市立病院に隣接する施設を訪れた。I君はベッド状になつた車椅子で現われた。大学時代I君はとても活発で、卒業した後、N社に就職したものの、会社生活は合わず、結局京都産業大学に職を得て、教授にも就き、大学改革などに活躍していた。その彼が一言も発することが出来ず、私の話すことにうなづくだけだった。途中懸命に話そうとして咳き込み、慌てて看護師を呼んだ。大学時代の思い出やその後京都で何回も会つたことを縷々話していると、三十分の面会制限時間はあつたという間に過ぎた。青春を共に駆け抜けた友は懸命に生きようとしていた。

施設を出て、バスに乗ろうと歩道を歩いていると、車椅子に乗つたお婆さんが片側二車線の道路の縁石に車輪が引っ掛かり動けなくなつていて、お婆さんは無謀にも道路を挟んだ反対側にある薬局に一人で行つた帰りらしい。車は何台も通るが、お婆さんを避けて走り抜ける。広い歩道には多くの自転車走るが、誰も助けようとしなない。私は思わず駆け寄つて車椅子を縁石から外し、病院の中まで送り届けた。お婆さんは何回も「ありがとう」を繰り返した。日本は何て寂しい国になつたのだろう。

京都での忘れられない一日だった。